

特集「東京とオリンピック・パラリンピック」

オリンピックの平和運動：その理想と現実^{1, 1)}

舛本直文（東京都立大学・武蔵野大学客員教授）²

Abstract

It is often said that “the Olympic Games are a celebration of peace.” The idea of international peace is at the heart of Pierre de Coubertin's philosophy of "Olympism." Then, what kind of peace movement is implementing at the Games? In this paper, the following events as peace movement at the Olympic Games are overviewed, and then focused on the ideals and reality of these events to try to find out the ways to solve the problems. That is, the philosophy of Olympism, the meaning of the Olympic symbol, the Olympic flame and Olympic torch relay, the "Olympic Truce" system, the "Olympic Truce Mural" as a peace activity in the Olympic Village, the "Symbolic release of dove" as the peace message in the opening ceremony, the SDGs as the collaborative activity between IOC and the United Nations (UN). Finally, the concept of “Positive peace” is reaffirmed.

抄録

「オリンピックは平和の祭典」とよく言われる。ピエール・ド・クーベルタンの「オリंपィズム」という思想の根本には、この国際平和思想がある。では、一体どのような平和運動が展開されているのであろうか？本稿では、オリンピックにおける平和運動として以下の事項を概観し、その理想と現実に着目して、課題解決の道を探ることにしたい。オリंपィズムという思想、シンボルマークの意味、聖火と聖火リレー、「オリンピック休戦」という制度、選手村での平和活動としての「休戦の壁画」、開会式の平和メッセージとしての「象徴的放鳩」、IOCと国連の連携活動としてのSDGsである。最後に、「積極的平和」という概念を再確認する。

Keywords: Olympism, Torch relay, Olympic Truce, Symbolic release of Dove, Positive peace

キーワード：オリंपィズム，聖火リレー，オリンピック休戦，象徴的放鳩，積極的平和

¹ Peace Movement of the Olympic Games: Its ideal and reality

² Masumoto Naofumi, Affiliated Professor of the Olympic Studies, Tokyo Metropolitan University and Musashino University

1. はじめに

オリンピックは「平和の祭典」とよく言われる。それは一体何故なのだろうか？「近代オリンピックの父」と称されるピエール・ド・クーベルタンの「オリंपィズム」という思想の根本には、この平和思想がある。それは、彼が1914年に考案したオリンピックのシンボルマークにも端的に表現されている。しかし、残念ながらそのことはあまり知られてはいない。

それでは、オリンピックが平和運動であるならば、そこでは一体どのような平和運動が展開されているのであろうか？「聖火リレー」や「オリンピック休戦」という制度はどのようなものなのであろうか？大会の始まりを告げる開会式では、どのような平和メッセージが発信されているのであろうか？さらに、オリンピック選手たちは選手村でどのような平和運動をしているのであろうか？また、平和運動の代表的推進機関である国連と国際オリンピック委員会（IOC）はどのように連携して活動しているのであろうか？

本稿では、これらのオリンピックにおける平和運動を概観し、その理想と現実に着目して、課題解決の道を探ることにしたい。

いくつかのエピソード

2018年2月、韓国の平昌で開催された冬季オリンピック大会のスピードスケート女子500m競技で名シーンが生まれた。日本の小平奈緒選手と韓国の李相花（イ・サンファ）選手の2人が、国や人種を越えた友情と、お互いをリスペクトし、全力を尽くして戦った後に、実に美しいシーンを見せてくれたのである。これはIOCが定めたオリンピックの3つの価値「エクセレンス・フレンドシップ・リスペクト（卓越・友情・尊敬）」というものを如実に体現したシーンでもあった²⁾。

先に滑った小平選手がオリンピック新記録を出し、優勝が期待されて会場は大歓声に包まれた。

その時小平選手は、後から滑る地元韓国期待の李選手のために、口到人差し指を当て、観客たちに静かにするようお願いの仕草をしたのである。しかし、李選手は小平選手に僅かに及ばず2位に終わった。このレース後のウィニングランでは、国旗を背に纏った2人がお互いに肩を抱き合い、小平選手は「チャレソヨ（よくやったね）、あなたを今も尊敬しています」と韓国語で李選手に語りかけたのである。全力を尽くして戦った李選手は泣きながら、ウィニングランを続け、小平選手との深い友情を確かめ合った。これがまさに「オリंपィズム」が目指す「平和の祭典」であるオリンピックを端的に表していると言えないであろうか。この2人は、この素晴らしい振る舞いによって、2019年に平昌記念財団から「韓日友情賞」を授与されている³⁾。

実はこの平昌大会に向けて、日中韓3か国は2016年9月23日に平昌でスポーツ行政担当相会談を開き「スポーツ交流を通じて相互理解と信頼を強化し、これを基盤に東アジアの平和共存のため努力する」とうたう「平昌宣言」を採択していた。3か国は2018年平昌冬季五輪と2020年東京五輪、2022年北京冬季五輪の成功のために運営ノウハウの共有などで協力を深めていく方針を確認し、「日中韓のスポーツ交流と協力がそれぞれの国民に対する理解拡大の重要な礎になることを認識し、3か国の未来志向の交流協力を定着させていく」と強調したのである⁴⁾。

この流れを受けて、2017年にカンヌンを中心に平昌平和教育フェスティバルが開催され、日中韓3か国を含む7か国から400人の子どもと教師達が参加するオリンピックの平和教育イベントが開催されてもいた⁵⁾。2018年平昌大会は、ムン・ジェイン韓国大統領の独断によって南北朝鮮の融和を目指した平和希求のオリンピックを演出していったのであるが、このように東アジアの国際政治や教育運動の一環として既に始まっていたのである。

また、2016年リオ大会の平和的エピソードの

一つが、難民選手団の参加であろう。今も続く深刻な難民問題であるが、IOCは難民であれオリンピックに参加する道を開いたのである。開会式では、全体の206番目に、地元ブラジル選手団の1つ前に登場した難民選手団にも大きな拍手が送られた。IOCから選ばれた10人の選手たちの出身は、南スーダン5人、エチオピア1人、シリアとコンゴ民主共和国が各2人であった。その時の様子をメディアは次のように伝えている。「祖国からの出場はかなわなかったが、彼らはもっと大きなものを背負っている。『自分たちは全ての国を代表している。希望の代表だ』とマルディニ、世界中で難民が生まれている困難な時代に特別なメッセージを伝えようとしている」と⁶⁾。難民選手団は東京2020大会でも編成されることが、2018年ブエノスアイレスのユースオリンピック大会時のIOC総会でも決定されている。難民への厳しい政策をとっている日本であるが、東京都や日本政府は、難民選手団に対して、果たしてどのような受け入れ体制を組むのであろうか？

「オリंपィズム」とは⁷⁾

「オリंपィズム」とは、オリンピック競技大会を開催する根本的な考え方である。それは4年に1度世界一を決定しようという競技的側面だけではなく、「スポーツと文化によって心身ともに調和のとれた若者を育て、平和な国際社会の構築に寄与しようとする」教育思想であり平和思想なのである。これは、近代オリンピックの復興を決めた1894年のパリ会議の時からクーベルタンの考えであるが、IOCが定める「オリंपィック憲章」にこの思想が明記されたのは、その後約1世紀も経過した1991年のことである。

現在の『オリंपィック憲章』の「オリंपィズムの根本原則」第2項には、「オリंपィズム」について次のように定められている。「オリंपィズムの目的は、人間の尊厳の保持に重きを置く平和な

社会の推進を目指すために、人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てることである」⁸⁾。このように、「オリंपィズム」の究極の目的は平和な社会の推進なのである。

日本では、2018年になって初めてこの「オリंपィズム」という言葉が『広辞苑』という有名な辞書に掲載された。ここには、「オリंपィック精神、クーベルタンが提唱した理想や原則、オリंपィック憲章では、肉体と意志と知性の資質を高めることを目指す人生哲学であるとする。」⁹⁾と説明されているが、これだけでは分かりにくいし、的外れでもある。IOCは、この「オリंपィズム」という考えに従って、様々な「オリंपィック・ムーブメント」を展開しており、「オリंपィック大会の定期的な開催」もその一つである。しかしこの競技大会は、世界中から注目されるため、その他のムーブメントを展開する絶好の機会なのである。IOCが、オリंपィック競技大会の開催以外に実施しているムーブメントには、スポーツ倫理の普及、平和の推進、差別の撤廃、男女平等の推進、アンチドーピング、選手の健康の保護、スポーツ・フォー・オール（スポーツする権利の保障）、スポーツと選手の政治的・商業的な悪用からの保護、環境問題への取り組み、レガシー（遺産）を遺すこと、スポーツと文化と教育の融合、国際オリंपィック・アカデミー（IOA）やオリंपィック教育の推進機関のサポートなど、非常に多くの活動がみられるのである。

1994年には、IOC設立100周年を記念するパリ会議で環境問題に取り組むことが決議され、「スポーツ・文化・環境」が「オリंपィズムの3本柱」と呼ばれるようになった。最近では、単なる「環境」というテーマに限らず、後述するように、IOCは国連が掲げる「持続可能な開発目標SDGs」にも積極的に取り組んで、幅広い意味での平和運動を展開しているが、それもこの「オリंपィズム」という考えに基づくものなのである。

「オリンピック・シンボル」の誕生

クーベルタンが唱えた「オリンピズム」の思想は、世界一有名なブランドとなった「オリンピックのシンボルマーク」にも端的に現されている。オリンピック・シンボルについて、現在の「オリンピック憲章」には次のように定められている。「オリンピック・シンボルは、単色または5色の同じ大きさの結び合う5つの輪（オリンピック・リング）からなり、単独で使用されるものを指す。5色のカラー版での使用では、左から順に青、黄、黒、緑、赤とする。輪は以下に示すグラフィックスのように結合し、左から順に上段に青、黒、赤の輪を、下段には黄、緑の輪を配置する。オリンピック・シンボルはオリンピック・ムーブメントの活動を表すとともに、5つの大陸の団結、さらにオリンピック競技大会に全世界の選手が集うことを表現している。」¹⁰⁾ ここには明確に示されていないが、5つの輪は世界五大陸の連帯と団結、地の白色を入れた6色は、クーベルタンが1913年に考案した当時の世界の国旗の色をすべてを網羅したとされ、世界のすべての国の連帯を象徴し、シンボリックに世界平和を表現するマークなのである。1920年のアントワープ大会の開会式で初めて掲揚されたこのIOC旗であるが、オリンピック・シンボルの経済的意味に執着するばかりに、このような平和メッセージを忘れないようにすべきである。

また、このシンボルマークはクーベルタンがデルフィのアポロンの神殿の祭壇に刻まれていた五輪のマークを参考に考案したという誤解が、いまだに見られるが¹¹⁾、このデルフィの石柱の五輪は、ナチス時代のカール・ディームが聖火リレーの威厳を高めるために彫らせたものであり、世界のオリンピック史家の間では「ディームの石」として知られているものである¹²⁾。いわば、ナチスの「やらせ」なのである。それよりもクーベルタンがシンボルマークの創作に参考にしたものは、1890年にフランススポーツ協会連合のシンボルマーク

として、2つの輪（赤と青の2色、地の白色の3色でフランス国旗のトリコロール）を描いたデザインであるというのが通説である¹³⁾。これは、今でもスイスのローザンヌにあるIOCのオリンピック・ミュージアムにも展示されている内容である。

オリンピックにおける平和運動

(1) 「聖火リレー」

現在のIOCの「オリンピック憲章」では、「聖火」については「オリンピック・フレイム Olympic flame」とだけ簡単に表現されている。そして、「オリンピック聖火は、IOCの権限のもとにオリンピックで採火される」と規定されている。さらに、「オリンピック・トーチは、IOCが承認したオリンピック聖火を燃焼させるための運搬用のトーチまたはそのレプリカである」とだけ、簡潔に定められている¹⁴⁾。このように、「オリンピック憲章」では、どこにも「聖なる」という意味の言葉は登場しないのである。しかしながら、JOCの訳では、この「Olympic flame」を「オリンピック聖火」、「torch relay」を「聖火リレー」と訳している¹⁵⁾。

実は、オリンピックで「聖火」が誕生した時の1934年IOC総会の議事録や戦後のIOCの「オリンピック憲章」には、この「火」は「神聖なる火 sacred fire」と表記されていたのである。それ以来「聖火」や「聖火リレー」には「聖なるもの」としての強固なイメージがあるために、JOCはいまでも「聖火」と訳しているのであろう。「聖火」のような「神聖なる火」という表記は、今では日本と韓国だけとされている。

オリンピック・スタジアムに初めて「火」が灯されたのは、通説では1928年アムステルダム大会の時であり、スタジアム外に高さ46mのマラソンタワーが設けられ、夜間だけ会場の位置を知らせるために火が灯されたとされてきた¹⁶⁾。しかし、1912年ストックホルム大会の公式報告書に

よれば、この大会で既にスタジアムの東西の塔に火が灯されていたことが新たに分かっている¹⁷⁾。さらに1932年ロサンゼルス大会では、スタジアム内に「オリンピック塔 Olympic Torch (オリンピックのトーチ・たいまつが正確)」が設置され、そこに点灯されたのである。朝日新聞はこれを「かがり火」と報道している。しかし、当時のこれらの「火」はオリンピアで採火されたものではないため、正確には「聖火=聖なる火」とは言えず「灯火」と呼んだ方が良いと思われる。

今も続く「聖火リレー」は、ヒトラーが率いたナチス時代の1936年ベルリン大会に向けて、オリンピック歴史研究家のカール・ディームが発案したものである。当時クーベルタン自身は、オリンピックの開催都市から次の開催地への「聖火リレー」を提案している¹⁸⁾。これは、この先に五大大陸をまたがって世界中の都市をリレーしていくという提案にもつながるものであり、五大大陸の連帯や世界各国の繋がりを示そうというものであった。

カール・ディームのアイデアは、1934年IOC総会においてドイツのIOC委員であるレバルトによって提案され、承認された。その時のIOC総会の議事録（当時はフランス語）には「聖火 (flamme sacrée) をリレーする」と記録されているが、コースは「マラトンからベルリン」とされていたのである。この「聖火 flammé sacrée (英語では sacred flame)」がオリンピック史上初めての「聖火」という語の登場になる。

さらに、「聖火」の採火式の提案は、1935年にギリシャの考古学者アレクサンドル・フィラデルフェウスが、古代オリンピアの祭典競技の聖地で太陽神アポロンから火を授かるように提案したことによる、とされている¹⁹⁾。この提案が認められ、「聖火リレー」のコースもオリンピアからスタートすることに変更されたのである。

ちなみに、1936年冬季大会はドイツのガルミッシュパルテンキルヘンで開催されたが、ここにも「灯火」が灯されている。公式報告書には「オリ

ンピックの火 Olympische Feuer」と記載されているが、読売新聞はこれを日本で初めて「聖火」という語を用いて報道したのである²⁰⁾。しかし、これもオリンピアで採火されたものではないため「聖火」ではなく単に「灯火」と呼んだ方が良かったはずである。

実は、オリンピアのヘラ神殿前で行われる現在ののような「聖火リレー」の採火式では、巫女に扮した女優が次のように祈りの言葉を捧げて、太陽光から凹面鏡でトーチに「火」を灯すのである。「神よ、大地、海、風の神よ、アポロンの神よ、この聖なる地に、聖火の火をとますために、太陽の光を送りたまえ。小鳥たちのさえずりが聞こえるこの聖なる地で、北京に送る聖火の火を灯せ。そして、世界の人々に平和を伝えよ。」²¹⁾このように、オリンピアの聖地で太陽神アポロンから「火」を授かるという儀式が執り行われるのが「聖火」の採火式なのである。ここでは、メディア取材も一切シャットアウトされるように、厳粛な神聖な儀式として太陽光から採火され、そして「平和メッセージ」をリレーしていくことが重要なのである。1964年東京大会の最終聖火ランナーに起用された坂井義則氏も、反戦・反原爆を含めた平和希求のメッセンジャーであったことはあまりにも有名な話しである。

クーベルタンも望んだ世界五大大陸を回り、平和メッセージを世界中に伝える「国際聖火リレー Global Torch Relay」が実現したのは、2004年アテネ大会の時であった。この時に掲げられたスローガンは、「聖火をつないで世界を一つに」である。この初の「国際聖火リレー」は、世界各地で大歓迎され、大成功に終わった。日本には、小雨の中ではあったが、銀座、浅草、六本木など、東京の中心街でリレーされている。

このアテネの「国際聖火リレー」の大成功を受け2008年北京大会でも「国際聖火リレー」を実施することになった。この時のスローガンは「情熱に火をつけ、夢を共有しよう」であった。しかしながら、当時人権弾圧や言論統制など多くの問

題を抱えていた中国の北京でオリンピックを開催することに対して、反対運動が展開され、北京大会の「国際聖火リレー」は世界各地で妨害やテロに遭ってしまい、大混乱に陥ったのである。日本では長野でリレーが執り行われ、大騒動になったのも記憶に新しい。このようなりレーの国際政治問題を受け、2009年にIOC理事会は、オリンピック開催国内の「聖火リレー」に限定することを決定したのである。そのため、2010年バンクーバー冬季大会以降のオリンピックでは、開催国内での「聖火リレー」しか実施されていない。

さらに、2014年ソチ冬季大会では、国際宇宙ステーションまでトーチを運んで宇宙遊泳するデモンストレーションをしたり、北極点まで「分火」してリレーしたりして、領土に関わる国際政治問題も生じたため、IOCは「聖火」を分ける「分火」も禁止し、いわゆる一筆書きでリレーするような現在のスタイルになったのである。平和メッセージリレーの思想は、一体どこに行ってしまったのであろうか？

2021年に延期となった東京2020大会の聖火リレーのコンセプトは「Hope Lights Our Way (英語) / 希望の道を、つなごう。(日本語)」というものである²²⁾。さらに、「支えあい、認めあい、高めあう心でつなぐ聖火の光が、新しい時代の日の出となり、人々に希望の道を照らしだします。」と謳われている。さて、ここでいう「希望」はどのような「希望」なのであろうか？さらに、日本国民は一体どのようなメッセージをリレーでつないでいこうとしているのであろうか？本来の平和メッセージであろうか？組織委員会の単なる盛り上げ要請に応えるものだけなのであろうか？それとも、企業の広告戦略の思惑に乘せられたままなのであろうか？国民には、是非とも「聖火リレー」本来の平和メッセージリレーという目的をしっかりと理解して走っていただきたいものである。

(2) 「エケケイリア (聖なる休戦)」

古代オリンピックの祭典競技は、石版に刻まれた

記録によれば、紀元前776に最古の大会の記録が残されているといわれている。しかしながら、それ以前もオリンピックの領有権をめぐるエリス地方の絶え間ない戦争や紛争によって、中断を余儀なくされていたとされる。そこで当時、オリンピックの領有権を争っていたエリス王のイフィトスとスパルタの立法者リュクルゴス、それにピサの第一執政官(アルコン)の3人が、「オリンピックの祭典競技を復活せよ」というデルフィのアポロン神の巫女の託宣に応じて「エケケイリア=聖なる休戦」を結び、オリンピックの祭典競技を再開したと伝えられている。この時の3人の名前が「イフィトスの円盤」というものに刻まれてヘラ神殿に奉納されたとされているが、定かではない。しかしここで肝心なことは、オリンピックの祭典競技に参加する競技者や観戦者の旅の安全を確保するために「エケケイリア=聖なる休戦」という制度が設けられたという事実である。これが、近代のオリンピックの平和運動の本質的な性格を形作っていくことになるからである。

「エケケイリア」とは、「手を置く」という意味のギリシャ語である。これはつまり、「戦争のための手出しをしない」という意味であり、「休戦」という意味を持つことになる。この休戦期間中は、戦争行為はもちろん、死刑判決まで延期され、安全な聖なる空間としてオリンピックの地は保護されることとなり、こうした故事から、オリンピックの



図1 スポンドフォロイの壺絵 (1980年モスクワ大会公式記録映画より)

祭典競技は「平和の祭典」の起源と呼ばれることになるのである。

図1の壺絵にあるように、エリス地方の3人の自由市民(ヘレネス=ヘラスの民=ギリシャ市民)が、「エケケイリア」をギリシャ全土に触れて回ったとされる。彼らは「スpondフォロイ=休戦運び人(スポンディ=平和)」と呼ばれ、従者を従え、3ルートに別れてギリシャ中に「聖なる休戦」のお触れを告げて回ったのである。スpondフォロイが回ってくると、各都市は戦争や紛争を中止しなくてはならなかった。この休戦協定を破ると、罰金や祭典競技への参加禁止などの重い処罰を受けた。当初は競技会の1か月前からが休戦期間であったが、次第に競技日数が増え、遠路からも参加者が増えるにつれ、休戦期間は祭典競技開始前の2か月、祭典競技終了後の1か月の合計3か月間に延びていった。

古代ギリシャの人々にとって、オリンピアの祭典競技に競技者や観戦者として参加することは非常に重要なことであった。それは当時の絶対神ゼウスに捧げる一大宗教儀式であるだけでなく、ギリシャの自由市民(ヘレネス)である証でもあり、ギリシャ人としてのアイデンティティと文化を再確認する重要な機会でもあったのである。そのため、「エケケイリア」という休戦協定を遵守することを通じて、競技者や参加者たちの旅の安全を確保するという現実的な理由から必要であったのである²³⁾。

(3) 近代の「オリンピック休戦」

クーベルタンが近代オリンピックを復興した際に、「オリンピック休戦」を取り入れようとしたが、逆に2度にわたる世界大戦で、オリンピックは夏冬合わせて5回にわたって中止となり、オリンピックが平和の象徴的先駆けとなることができなかった。

IOCの公式発表とは異なり、近代オリンピックで「オリンピック休戦」が初めてアピールされたのは、1952年ヘルシンキ大会の時であった²⁴⁾。

当時、世界は東西冷戦の真ただ中、そこに旧ソ連がオリンピックに初めて参加したのである。旧ソ連は東側陣営のために選手村を分村させた。このような対立が生じたため、ヘルシンキ大会の組織委員会は「オリンピック休戦」を訴え、東西陣営によるオリンピックでの代理戦争を防ごうとしたのである²⁵⁾。

続く1956年メルボルン大会の直前には、旧ソ連軍がハンガリーの首都ブダペストに侵攻したため、ハンガリーの選手たちが大会に参加することが難しくなった。そこでIOCのブランデー会長は単独で「オリンピック休戦」をアピールし、ハンガリーの選手たちがオリンピックに参加できるように配慮したのである²⁶⁾。しかし、メルボルン大会では「血の水球事件」として名高い旧ソ連とハンガリーの水球の対戦中での流血事件が起きているし、多くのハンガリー選手たちは迫害を恐れて母国に戻らずに亡命している。

1992年バルセロナ大会では、内戦状態にあった旧ユーゴスラビアに対して国連がスポーツを含めたすべての国際交流を禁止したため、旧ユーゴスラビアの選手はバルセロナ大会に参加できなくなる状況が発生した。そこで、IOCが初めて「オリンピック休戦」をアピールし、国連と交渉して旧ユーゴスラビア選手たちのバルセロナ大会への参加の道を開いたのである。IOCは、公式にはこれが近代オリンピックで初めての「オリンピック休戦」であるとしている²⁷⁾。

翌1993年には、国連が初めて1994年リレハンメル冬季大会のために「オリンピック休戦」の総会決議を行った。これ以後、現在のように夏・冬両大会の前年の国連総会で、IOCと国連が連携して「オリンピック休戦」決議を採択し、その遵守を世界中にアピールするようになったのである²⁸⁾。

2000年にはIOCとギリシャ政府が協力してアテネに「国際オリンピック休戦センター」を設立し、ここが中心となって世界でオリンピックの平和運動を展開している²⁹⁾。しかし、世界各国の国内オリンピック委員会(NOC)とどのように連

携してその平和運動を広めていくかが課題の一つなのである。

選手村の中での平和運動：「休戦賛同の壁画」

「オリンピック休戦」の国連総会決議とその遵守は、平和な世界の構築を目指すためには重要なものである。では、オリンピックの主役である選手たちはこの平和運動にどのように参加しているのでしょうか？

2018年平昌冬季大会では、2か所の選手村内に「オリンピック休戦賛同の壁画（ミューラル）」が設置された。選手村に滞在している選手・役員は誰でも賛同すれば、この壁画にサインをすることができた。この「休戦賛同の壁画」への署名が始まったのは、2004年アテネ大会の時からである。アテネ市内の「オリンピック休戦センター」で、ローマ教皇や、アメリカのクリントン大統領など、世界各国の首脳たちが集まってサインセレモニーを行っている。（その時のソフィア王女のサインの様子の写真が東京2020大会のウェブサイトの「オリンピック休戦」の取り組みに用いられている。³⁰⁾ 続く2006年トリノ冬季大会から「休戦の壁」は選手村内に設置され、「オリンピック休戦」に賛同する選手たちも署名することができるよう

になった。

この「壁（ウォール）」は、2016年リオデジャネイロ大会から「壁画（ミューラル）」と呼ぶことに変更された。これは、「壁」という言葉には、人と人之間を遮るようなマイナスのイメージがあるという理由からだとされている。ちなみに、東京2020大会のウェブサイトには、この「休戦の壁画（ミューラル）」の設置について、「大会期間中には『休戦ムラール（壁）の設置』や」と記載しているが、これは2016年の変更を受けて、世界標準に従い「休戦の壁画（ミューラル）」と訂正する必要があると思われる。

ところで、「休戦賛同の壁画」は、大会後にどのように活用されているのでしょうか。2010年バンクーバー冬季大会では、大会後にオークションにかけられ、ハイチ大地震の被災地への義援金に充てられ、現物は残されていない。現在、バンクーバーの選手村跡地の公園には、サインをした選手たちの名前が刻まれた「休戦の壁」の記念碑が建てられている（図2）。2012年ロンドン大会では、「休戦の壁」10本の内、5本がスイスのローザンヌにあるオリンピック・ミュージアムに今も展示されている。しかし残念ながら、その他の大会の「休戦賛同の壁」の所在は確認されていないのである。選手たちの貴重なサインと賛同メッ



図2 2010年バンクーバー冬季大会選手村跡地の公園の「休戦の壁」記念碑と筆者

セージの所在も活用の様子も不明なままのである。これは残念な限りであると言わざるを得ない。

東京 2020 大会の選手村にも、この「休戦賛同の壁画」が設置される予定とされている。しかし、大会後にこの壁画がオリンピック・パラリンピック教育とともに平和教育の教材としてどのように活用されるか、それが重要な課題なのである。

開会式の平和メッセージ：「象徴的放鳩」

オリンピックの開会式では、必ず「ハト」が登場することになっている。これは、オリンピックが平和の祭典であることを表現するために、平和の象徴である白いハトを飛ばす慣例があるためである。この開会式における「象徴的放鳩」の歴史を振り返っておこう。

1896 年第 1 回アテネ大会では、開会式ではなくテニスの試合の開始前に、ギリシャ国旗の色のリボンをつけたハトが飛ばされた。開会式で初めてハトが登場したのは、1920 年アントワープ大会である。この時には、参加国の国旗の色のリボンをつけたハトが飛ばされている。続く 1924 年パリ大会でも、45 か国の国旗の色のリボンで飾かざられたハトがメインスタジアムを舞っている。ナチスが威信をかけて開催した 1936 年のベ

ルリン大会では、同じく参加国の国旗色で飾られた 2 万羽の伝書鳩が放たれたと記録にある。このように、近代オリンピックの初期から当分の間は、参加国の国旗の色のリボンをつけたハトを飛ばしていたのである。

この時代の「オリンピック憲章」では、平和の象徴であるハトを飛ばし、その後に祝砲を放ち、最後にオリンピックの聖火が点火されるというように、式典の順番が定められていた。しかし、1991 年版の憲章から順番を入れ替え、聖火を点火した後にハトを飛ばす方式に変えたり、本物のハトを飛ばさなくなったりしている。そのきっかけは、1988 年ソウル大会の開会式で起きた事件である。実はこのソウルの開会式では、先に飛ばしたハトが聖火台にとまっているところに点火してしまい、ハトが数羽焼け死んでしまったのである。その様子がテレビで世界に放映され、動物愛護団体などから批判を受けることになってしまった。このハトの「焼き鳥事件」を受け、1992 年バルセロナ大会以降、オリンピックの開会式では本物のハトを飛ばさなくなったのである。

最近では、「象徴的放鳩（本物ではないハトを代わりに飛ばす）」のパートのために、様々な演出や工夫がされている。例えば、2018 年平昌冬季大会では、手にランプをもった大勢の人々が白



図 3 2018 年平昌冬季大会の開会式での「象徴的放鳩」（筆者撮影）

いハトが羽ばたく様子を描き出した(図3)。2016年リオデジャネイロ大会では、大勢の子どもたちが白いハト形のカイト(凧)を飛ばしながら入場してきている。このカイトには、ケニアの子どもたちによる平和メッセージが書き込まれていた。この他には、大きな幕の上に白いハトの映像をスライドで投影したり、ハト形の白い風船を飛ばしたりと、各大会でユニークな演出が行われている。

現在のオリンピック憲章では、式典について次のように規定されている。「1.開会式と閉会式は、IOC プロトコルガイドおよびオリンピック開催地契約に定められたプロトコルに関する条件に従い催すものとする。2.すべての式典のシナリオ、予定、プログラムの内容と詳細は、IOCに提出し事前の承認を得なければならない」³¹⁾。さらにこのプロトコルによれば、平和希求の象徴である放鳩は、入場行進と聖火の点火の間に行われることになっている。参考までにIOCの規定(テクニカル・マニュアル)を参照しておこう。「放鳩：白いハトの象徴的放鳩は、オリンピックが平和を目指している証である。この放鳩は創造性豊かに執り行われるが、オリンピックの伝統に根ざしたものであることを示すべきである。生きたハトは用いるべきではない。この象徴的放鳩は、選手団入場後、聖火台への最終点火前であれば、いつでも執り行うことができる。」(IOC, 2012年版)

今では、聖火台への点火前に、どのような演出でハトが放鳩されるかは事前に明らかにされない「サプライズ・プログラム」の一つとなっている。これも各大会で開会式を見る楽しみの一つとなっている。さて、来年の東京2020大会ではどのような象徴的放鳩になるであろうか?単なるお祭り騒ぎや盛り上げに資するような「象徴的放鳩」ではなく、平和メッセージをしっかりと発信してほしいものである。野村萬斎チームの式典の演出が見物である。

IOC と国連の連携活動

IOC と国連は、連携して環境保護や平和運動にも取り組んでいる。2015年の国連総会で、IOCのバッハ会長は「IOCのゴールは国連のゴールでもある」と述べ、国連のバン事務総長も「国連の原理はIOCの原理だ」と演説し、両機関が今後協力し合って取り組んでいくことを確認した。

さらに、国連が2015年までに達成すべき目標として定めてきた「ミレニアム開発目標 Millennium Development Goals, MDGs」に対して、IOCもこれまでに協力して活動してきた。その達成目標とした期日が終了し、国連が新たに2030年までに達成すべき目標として掲げた「持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals, SDGs」へもIOCは協力して取り組むことを表明したのである。これは、「誰一人取り残さない No one will be left behind」という理念のもと、気候変動などの地球環境の問題だけでなく、天然資源の保護と再利用、生物の多様性、差別撤廃などの人権保護、高齢化社会への対応など、様々な社会的な課題に取り組んでいくということである。

2015年9月26日の第70回国連総会において、IOCのバッハ会長は、国連が掲げた17のSDGsのゴール(図4)³²⁾に対して、スポーツ界が如何に貢献できるかを表明した³³⁾。そうして、国連の2030年までのアジェンダであるSDGsと歩調を合わせて、IOCのオリンピック・アジェンダ2020として共同して取り組む目標として、以下



図4 国連のSDGsの17のゴール
(2018年1月1日修正版)

の11のゴールをあげている³⁴⁾。

目標3：全ての人に健康と福祉を Ensure healthy lives and promote well-being for all at all ages

目標4：質の高い教育をみんなに Ensure inclusive and quality education for all

目標5：ジェンダー平等を実現しよう Achieve gender equality and empower all women and girls

目標8：働きがいも経済成長も Promote inclusive and sustainable economic growth, employment and decent work for all

目標11：住み続けられるまちづくりを Make cities inclusive, safe, resilient and sustainable

目標12：つくる責任つかう責任 Ensure sustainable consumption and production patterns

目標13：気候変動に具体的な対策を Take urgent actions to combat climate change and its impacts

目標14&15：海の豊かさを守ろう&陸の豊かさも守ろう Conserve and sustainably use marine resources and protect and promote use of terrestrial ecosystems

目標16：平和と公正をすべての人に Promote just, peaceful and inclusive societies

目標17：パートナーシップで目標を達成しよう Implement global partnerships for sustainable development

(日本語訳は国連広報センターによる)

IOCはこれらの11のゴールに対して、スポーツ、体育、練習、スポーツ競技会、スポーツ団体の運営などを通じて、目標達成に努力するという意思表示をしたのである。

さらに、IOCが2014年の総会で承認した「オリンピック・アジェンダ2020」というIOCとオリンピックの改革のための40の提言の内、提言4では、オリンピックのあらゆる要素にサステナ

ビリティを導入するとし、提言5では、オリンピック・ムーブメントの日常的な活動にサステナビリティを導入するとしている。そのために、IOCは、国連環境計画（UNEP）などの専門組織とも協力して活動しているのである。

東京2020大会では、「Be better, together/ よりよい未来へ、ともに進もう」というサステナビリティに関する標語のもと、IOCと国連の方針に従って大会を開催しようとしている³⁵⁾。そのため組織委員会は、「気候変動」「資源管理」「大気・水・緑・生物多様性等」「人権・労働、公正な事業慣行等への配慮」「参加・協働・情報発信」という5つの柱を掲げてSDGs関連の活動を展開している。しかし、これを機にSDGsへの取り組みがスポーツ界におけるレガシーとなっていくか、それが大きな課題でもある。

最後に：「積極的平和」とは

ところで本稿では、これまで「平和」とは何かを特に問うことなく論を進めてきた。しかし、「平和」とは一体どのようなことを指すのか、と改めて問われると、答えに窮する概念かも知れない。では、「平和とは、ただ単に紛争や戦争のないこと」なのであろうか？

「平和学の父」と称されるノルウェーのヨハン・ガルトゥングによれば、「ただ単に紛争や戦争のないこと」は「消極的平和 negative peace」ということになる³⁶⁾。では、それはなぜ消極的といわれるのであろうか？また、「積極的平和」というからには、その対概念として「積極的平和 positive peace」という考えがあるはずである。

ガルトゥングは次のように言う。「平和にもまた二つの側面が存在する。つまり、個人的暴力の不在と構造的暴力の不在である。これらをそれぞれ消極的平和と積極的平和と呼ぶことにしよう。」「個人的暴力の不在は積極的に定義された（平和）の状態をもたらすものではないが、構造的暴力の不在はわれわれが社会正義と呼ぶところのもので

あり、それは積極的に定義された（平和）の状態である（権力と資源の平等主義的配分）」³⁷⁾と、こうして平和理論が紛争理論だけでなく、発展理論と密接に結びつくことになるとガルトゥングは言うのである。

ガルトゥングは、戦争や個人的で直接的な暴力がなくなることを「消極的平和」とよび、一方「積極的平和」とは「構造的暴力」（社会的不正）がないこと、つまり「社会的公正」が保たれている状態を指すと言う。ここでガルトゥングの言う「構造的暴力」とは、抑圧、搾取、人権無視などの社会の構造的な問題のことを指し、このような社会自体が抱えている問題群がなくなり、社会の公正が万人に保証された状態を「積極的平和」と呼ぶのである。つまり彼は、社会構造的にないものがあるものに変わるのが積極的(positive)であり、社会構造的にある問題がなくなることが消極的(negative)であると考えているとも言えるのである。

藤田明史は、このようなガルトゥングの「積極的平和」をわかりやすく言い替えて、「平和とは、人間の基本的な必要がすべて満たされた社会の状態」³⁸⁾であると言う。さらに藤田は、ここでいう「人間の基本的な必要」とは、生存・福祉・自己（アイデンティティ）・自由など、人間が人間として生きていくために最小限必要なものであると言う。彼はまた、平和は到達不可能な単なる一つの理想ではなく、「平和は、人間存在の現実性の上に立った、社会のダイナミックな一状態である」とも主張している。

このようなガルトゥングの積極的平和概念に従うならば、オリンピックにおける平和運動も、紛争や戦争を一時休止して平和構築の糸口を探ると言う「オリンピック休戦」にのみ着目するのではなく、「積極的平和」が意味する「平和文化」の形成に向けて寄与する必要がある。そのために、IOCは国連とも包括的協定を結んで「持続可能な開発目標（SDGs）」を含め、様々な平和運動と一緒に取り組んできていることが理解できるので

ある。

参考までに、現在の安倍政権は「積極的平和主義（英語表現は Proactive Contribution to Peace）」を掲げて国際貢献を積極的に謳っているが、この Proactive ということは、「先に率先して行う」という意味であり、その率先性が戦争など武力行使による平和への貢献であっては、真の平和とは言えないことになる。ガルトゥングはこのような安倍政権が使用する意味での「積極的平和主義」に「Positive Peace」という英語表現を使うことに反対している³⁹⁾。それは彼が、安倍政権が用いる用語とは正反対の意味で「積極的平和 Positive Peace」という用語を用いているからである。

基本的人権が保障され、人間の基本的な必要が満たされる社会の実現に向けて、オリンピックをはじめとするスポーツ界もガルトゥングの言う「積極的平和」の実現に向けて、どのようなことが可能なのか、問われているのである。IOCに限らず、JOCやオリンピック教育・研究に関わる人たちは皆、オリンピックを機に、このような生き方ができる人や「積極的平和」に向けて貢献できる人間が今後生まれていくように努力すべきなのである。このような人間をオリンピックで遺していくこと、これを「ヒューマン・レガシー」と呼びたいのである。これについては論を改めたい。

（本講演後に発生した世界的な新型コロナウイルス感染問題に際しても、IOCを先頭に人命ファーストの姿勢と活動を展開し、「積極的平和」の実現に資するオリンピック・ムーブメントを期待しながら！）

注

¹⁾ 本論考は、2019年12月19日に「日本体育大学セミナー」において同じ演題で講演した内容に加筆したものである。

²⁾ YouTubeで視聴可能。「2018年 平昌冬季オ

- オリンピック 小平奈緒選手と李相花（イ・サンファ）選手」
<https://www.youtube.com/watch?v=snRrs0yOKsQ>（2020年4月25日閲覧）
- 3) 「小平奈緒と李相花に韓日友情賞 平昌五輪レース後に抱擁」朝日新聞, 2019年4月7日
<https://www.asahi.com/articles/ASM474SXSM47UHBI00W.html>（2020年4月25日閲覧）
- 4) 文部科学省ウェブサイト
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop08/list/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/11/11/1379382_1_1.pdf（2020年4月25日閲覧）
- 5) IOC ニュース
<https://www.olympic.org/news/400-children-and-teachers-participate-in-pyeongchang-2018-peace-education-festival>（2020年4月25日閲覧）この重要なニュースを日本のメディアは何も報道しなかった。
- 6) 日本経済新聞, 2016年8月6日
https://www.nikkei.com/article/DGXLASDH06H1E_W6A800C1UUB000/?uda=DGXZ ZO0218874021122009000000（2020年4月25日閲覧）
- 7) 以下の論考は、拙著をもとに、2019年12月19日の講演内容に幾分手を加えたものである。舛本直文（2020）オリンピックの平和運動—その理想と現実、後藤光将（編著）『オリンピック・パラリンピックを学ぶ』, 岩波ジュニア新書, pp.69-89.
- 8) IOC（2019）オリンピック憲章, p.10（2019年日本オリンピック委員会（JOC）訳版）。以下オリンピック憲章への言及は、このJOC訳版を用いる。
- 9) 岩波書店（2018）『広辞苑』第7版
- 10) オリンピック憲章, p.20.
- 11) 平田竹男他編（2016）パラリンピックを学ぶ, 早稲田大学出版部, p.25.
- 12) 舛本直文（2019）オリンピックは平和の祭典, 大修館書店, p.157.
- 13) 同上, p.156.
- 14) 同上, 憲章, p.21.
- 15) 同憲章, p.85.
- 16) 舛本直文, 同上書, p.52. IOCのfactsheetもそう。
- 17) Molzberger, Ansgar（2011）. Fire, When Great Festivals Are Celebrated at the Stadium-The “Olympic flame” in Stockholm 1912. Journal of Olympic History, pp.44-45.
- 18) 舛本直文（2019）聖火リレー物語：聖火は、何故聖火なのだろうか？ 稲城市ICカレッジ『梨の葉』（2019年版）, pp.26-33.
- 19) Barney, Robert K. Bijkerk. Anthony Th.（2005）The Genesis of Sacred Fire in Olympic Ceremony – A new interpretation. Journal of Olympic History, 13, pp.6-27.)
- 20) 舛本直文（2019）聖火リレー物語, pp.26-33.
- 21) 2008年北京大会時の祈りの例：舛本直文（2018）, 『決定版 これがオリンピックだ』講談社, p.81.
- 22) 東京2020大会組織委員会ウェブサイト
<https://tokyo2020.org/ja/torch/about/>（2020年4月25日閲覧）
- 23) 舛本直文（2019）オリンピックは平和の祭典, 大修館書店, pp.16-17.
- 24) 同上, pp.76-77.
- 25) 同上, pp.77-78.
- 26) 同上, pp.83-84.
- 27) IOCのFactsheetによる
- 28) 前掲舛本, pp.85-87.
- 29) 同上, pp.172-176.
- 30) 東京2020大会組織委員会のウェブサイト. スペインのソフィア王女のサインの写真
<https://tokyo2020.org/ja/games/olympictruce/>（2020年4月25日閲覧）
- 31) 同憲章, 第55条, p.86
- 32) 国連広報センターのウェブサイトより.
www.unic.or.jp/activities/economic_social_

development/sustainable_development/2030agenda/sdgs_logo/ (2020年4月25日閲覧)

³³⁾ IOCのウェブサイト

https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/News/2017/06/2017-Sustainable-development-en.pdf#_ga=2.83737694.937050481.1525227997-721668358.1479183351 (2020年4月25日閲覧)

³⁴⁾ IOCのウェブサイト

https://stillmed.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/News/2017/06/2017-Sustainable-development-en.pdf#_ga=2.8329082.937050481.1525227997-721668358.1479183351 (2020年4月25日閲覧)

³⁵⁾ 東京2020大会組織委員会のウェブサイト.

<https://tokyo2020.org/ja/games/sustainability/> (2020年4月25日閲覧)

³⁶⁾ Galtung, Johan(1996) *Peace by Peaceful Means*. Sage, pp.2-3. および, ヨハン・ガルトゥング (高柳先男他訳) (1991) 構造的暴力と平和. 中央大学出版部, pp.44-45.

³⁷⁾ ヨハン・ガルトゥング (高柳他訳) (1991) 同上, p.44.

³⁸⁾ ヨハン・ガルトゥング・藤田明史 (編著) (2003) *ガルトゥング平和学入門*. 法律文化社, pp.9-10.

³⁹⁾ 2016年ガルトゥングの東京渋谷講演より. また, ヨハン・ガルトゥング・御立英史訳 (2017) *日本人のための平和論*. ダイヤモンド社, pp.19-20.

(受理日: 2020年5月7日)